【研究ノート】

大東文化学院「九段校舎」について

宮瀧　交二

はじめに

大東文化大学の前身である大東文化学院が、大正 12（1923）年、東京市麹町区富士見町 6 丁目 16 番地（現・千代田区富士見 1 － 11）に所在した法政大学の校舎を譲り受けて開校したことは広く知られているところである。この校舎は、後の「池袋校舎」「青砥校舎」に対して「九段校舎」と呼ばれている。

現在この場所は千代田区営富士見住宅となっているが、現地を訪ねてみると、平成元（一九八九）年に建立された「大東文化大学発祥の地」と題する石碑が存在する。石碑には、

　　大東文化大学発祥の地
本学の前身である大東文化学院は
大正十年の貴衆両院による「漢学振
興に関する建議案」の決議に由来し
大正十二年九月二十日、この地に
設立された。
　その後、昭和二十四年四月、新制
大学の認可を得、現在の大東文化大学
（板橋区高島平一－九－一）として発展
し来っている。
　ここに、その歴史を刻し、建学の
志を新たにする。
　平成元年四月吉日
　　学校法人　大東文化学園
　　大　東　文　化　大　学

と刻まれており、かつてこの地で名乗りを上げた本学の「九段校舎」のよすがを僅かに偲ばせてくれている［資料１～３］。

小稿では、この「九段校舎」に関してこれまで本学で確認されていた

資料１　「大東文化大学発祥の地」碑・遠景（2018. 12. 30. 筆者撮影）

資料２　同・近景（同）

資料３　同（同）

情報を整理・確認した上で、本来の「九段校舎」の持ち主であった法政大学側に遺された史料を調査し、新たな知見を得ようとするものである。

1．大東文化学院「九段校舎」に関する各記念誌の記述

大東文化大学では、これまで開校から記念となる年に複数の記念誌が刊行されている。ここでは、その中から以下の4誌を取り上げてみたい。

①大東文化大学創立五十周年記念誌編纂委員会編『大東文化大学五十年史』、1973年。（以下、『50周年誌』とする）

②大東文化大学創立七〇周年記念事業記念出版推進委員会編『大東文化大学七十年史』、1993年。（以下、『70周年誌』とする）

③大東文化大学創立80周年記念事業委員会80周年誌編集推進委員会『心は放て天地間、まなこはさらせ世の移り　大東文化大学創立80周年誌』、2003年。（以下、『80周年誌』とする）

④大東文化大学歴史資料館（大東アーカイブス）『大東文化大学の歩んできた道』、2013年。（以下、『90周年誌』とする）

各記念誌における大東文化学院「九段校舎」に関する記述を整理すると、以下の通りである。

①『50周年誌』

第二編　大東文化学院時代／第一章　九段時代／第二節　開校当時の学院／（一）第一期生の入学（167頁）

大正十二年九月二十日、大東文化学院の設立が認可され、買収した麹町区富士見町六丁目十六番地の元法政大学の旧校舎を使用して開校の諸準備が進められた。梧桐に囲まれた古色蒼然たる校舎であったが、昭和十六年二月池袋に移転するまでの十九年間、漢学の伝統を保持し続けて来た意義深い校舎であった。（後略）

同／第五節　学則改定と校舎移転／（二）校舎移転（308～310頁）

元法政大学の旧校舎を買収して開校した九段校舎は明治時代の建

築にかかり、開校当時よりすでに老朽化し、修理を加えて使用していたものである。三部制施行による学生数の増加は、老朽化の上にさらに一層の狭隘を感じさせるに至った。三部制施行当初の昭和十三年度の募集定員は各部とも五十名であったが、第三部の志願者が多数であったため十四年度には八十名に増員した。また下表（筆者註・省略）に示す通り第二部の志願者も激増し、校舎拡張は喫緊の問題となった。

このように志願者は増加したが、校舎は狭く、定員数増加は到底不可能であり、新校舎建設は焦眉の問題となったわけである。しかし国庫補助は年々減額、蓄積資金もない当時の大東にあってこれが資金の獲得は容易ならぬことであった。（中略）

「同窓会報」（第六号）に沢田総清氏（教務課長、高一卒）は次の如く近況を報じている。

昭和十六年度は学院の人事にもかなり異動があった。池袋の新校舎は出来上って面目は一新した。学生は約八百名で毎日勉学にいそしんでいる。（中略）そのために、今次の議会に於ては、例年の経常費への政府補助金の外に、特に二十一万一千五百円の補助金が下附されることの議案が通過した。（中略）

校舎新築の為に生じた負債は、もうこの補助金によって皆済になって、茲に数万の基本金が残ることになる。（後略）

なお、校地買収については、当時の学監であった成田千里氏の斡旋によるものである。同氏は市立一中校長から豊島師範学校長となり、さらに池田師範学校長となったが間もなく退職、大東の学監に就任された。近所に住む地主と昵懇の間柄から校地買収に専念、旧池袋校地の獲得に成功したとのことである。

かくして昭和十六年二月八日、二十年間住み慣れた思い出深い九段校舎から豊島区池袋三丁目一三八五番地の新校舎に移転、爾後池袋前期時代へと入っていくわけである。

②『70 周年誌』

第一章　七〇年の歩み／第二節　九段時代４／はじめに（39 頁）

児玉花外作詞の学生歌の一節に、「理想の月の照る清く、桐の高窓青年の」とあるが、開校当時の大東文化学院は、梧桐に囲まれた古色蒼然たる校舎であった。そして一九四一（昭和一六）年三月、池袋に移転するまでの一九年間、漢学の伝統を培い、現在地には記念碑が建てられている。（後略）

同／一　初期の九段時代（39 ～ 40 頁）

（前略）九段の校舎は九月一日、大震災の日に買い入れ契約を結んだそうである。あの辺は震災にも戦災にも焼け残ったのである。校舎は木造ペンキ塗り総二階で、元法政大学の旧校舎であった。（後略）

同／三　後期の九段時代／（一）　ボロ校舎にも気概と自負を持って（49 頁）

（前略）九段校舎は環境的にはすばらしい場所にあったが、何分にも狭い敷地で建物も貧弱であったから、肩身の狭い思いをしたことは事実である。もちろんその中にも、「松下閑村なりと雖も…」といった吉田松蔭の詩にみえる気概と自負とは皆それぞれに持っていたのである。当時の学生は梧桐に囲まれたあのオンボロ校舎に限りない愛着を感じている。（後略）

同４／（二）「東亜政経科」を新設（51 頁）

（前略）池袋の新校舎が一九四一（昭和一六）年春にはほとんど出来上がり、一五期生は卒業式だけ新校舎で行った。一七（ママ）年間に及ぶ九段校舎時代が終わって、いよいよ第一次池袋校舎時代に移るわけである。

③『80 周年誌』

九段時代（20 ～ 21 頁）

大正 12（1923）年 2 月 11 日、漢学振興策の第一歩として大東文化協会を創立し、同年 9 月 20 日財団法人ならびに大東文化学院の設立が認可され、麹町区富士見町 6 丁目 16 番地に大東文化学院を開校しました。（中略）

九段校舎は、元法政大学の旧校舎で傷みがひどく、また敷地が狭かったため、学生たちは窮屈さを感じていましたが、このオンボロ校舎に限りない愛着を感じていたと、当時を知る同窓生は『大東文化大学七十年史』に記しています。（後略）

④『90 周年誌』

Ⅰ　大東文化学院創設の背景－建学への歩み／３．大東文化学院の創設（ 9 ～ 10 頁）

（前略）大東文化学院の設立申請書は 1923（大正 12）年 8 月 30 日に提出されており、（中略）この時に申請された校舎位置は、「東京市神田区錦町三丁目十番地」であった。しかし、同年 9 月 15 日になって「大東文化学院位置変更願」が出され、すでに申請していた大東文化協会事務所を含む校舎建物が、大震災による「火災ノ為全焼致候ニ付別紙土地建物売買仮契約書写ノ通東京市麹町区富士見町六丁目十六番地へ位置ヲ変更シ該箇所ヲ以テ大東文化学院校舎ニ充当致度此段及御願候也」と変更する旨を記した再申請がなされた。神田区錦町の校舎予定地はもともと東京工科学校で、その一部を借り受けての開校を予定していたのであったが、被災後、同地にあった大東文化協会事務所は一時的に木下成太郎宅である麻布区宮村町 10 番地へ置き、文部省も「校舎ハ焼失セリ当分法政大学ニテ授業ヲ為ス予定ナリ」として 9 月 20 日に設立を裁可、さらに校舎位置変更についても「（麹町区富士見町の）法政大学旧校舎ヲ買収シテ

校舎ニ充当セントス」ということで申請を認めたのであった。なお、予定開校年月日は同年10月1日付のまま認可が下されている。（後略）

同／４．大東文化学院開院式（12頁）

（前略）大東文化学院は、東京市麹町区富士見町6丁目16番地にあった通称「九段校舎」と呼ばれた校舎にはじまり、その後昭和16年に池袋へ移転するまでのおよそ19年間を同地で過ごすこととなった。九段校舎は鮮やかな梧桐に囲まれていたのが特徴で、それを「青桐」と呼び、大東文化学院の象徴として長く親しむこととなった。（後略）

Ⅱ　大東文化学院の誕生／４.九段校舎から池袋校舎へ（28～29頁）

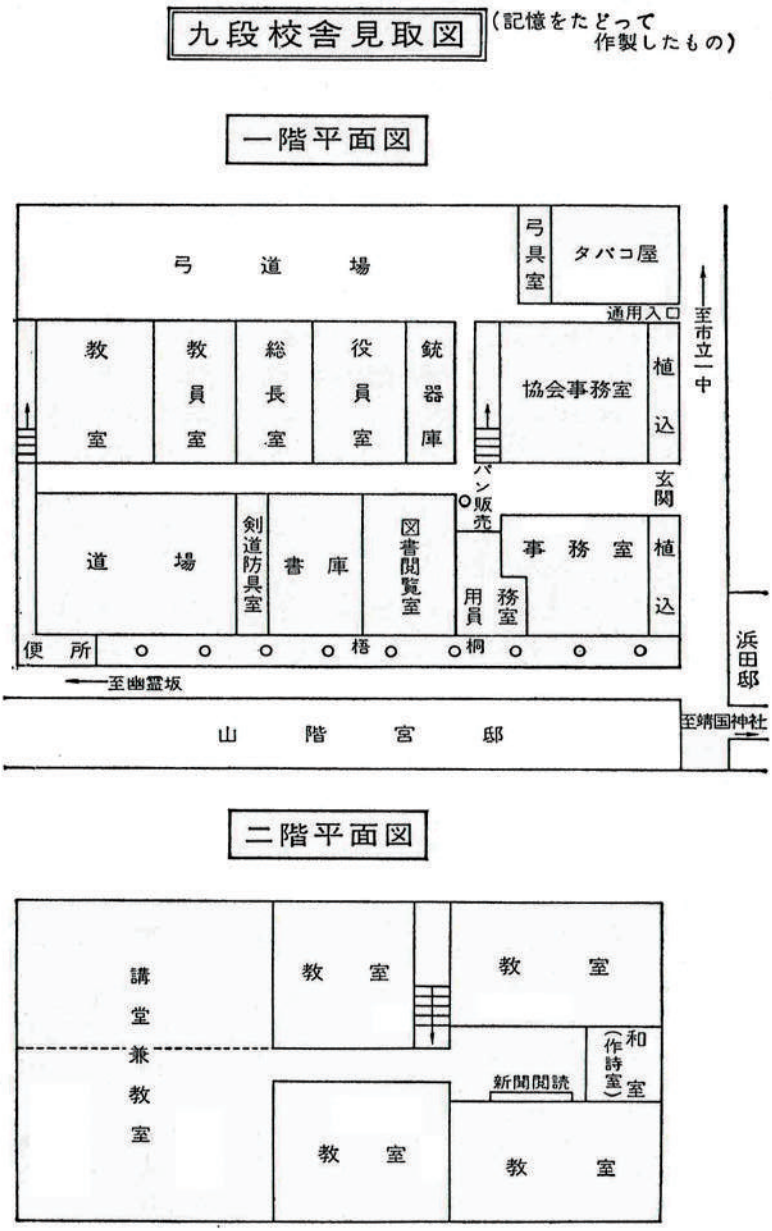
大東文化協会及び大東文化学院の創設時である1923（大正12）年より使用していた九段校舎は、狭い敷地に明治期に建てられた小さな木造校舎であった。そのため使用当初からすでに老朽化が進んでおり、また常に収容人数も限界の状態で授業が行われていた。同時に、創設時から続いていた政府からの補助も年々減額されるようになり、授業料の徴収と学生給付金の減額ともやむを得ない状況となっていった。昭和10年代に入る頃には、校舎移転を含む学院経営方針について総体的な転換が必要な時期となっていたのである。

このような各記念誌における大東文化学院「九段校舎」に関する記述を整理すれば、以下のようになろう。

a．大正12（1923）年9月20日に設立が認可された大東文化学院「九段校舎」の所在地は、東京市麹町区富士見町6丁目16番地（現・千代田区富士見1丁目11番地）であり、昭和16（1941）年2月に「池袋校舎」に移転するまで使用された。（①）

b.「九段校舎」は、法政大学の旧校舎を譲り受けたものであった。（①）

c．当初、大東文化学院は東京市神田区錦町三丁目十番地に所在した



資料４　「九段校舎」見取図(『大東文化大学五十年史』より)

東京工科学校の校舎を譲り受けて使用する予定であったが、関東大震災で全焼したため、その使用を断念した。(④)

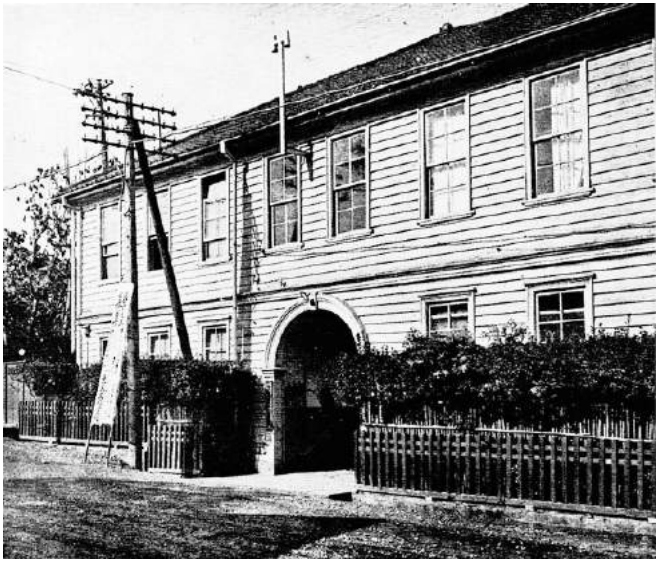
d.「九段校舎」は、明治時代の建築で、大東文化学院の開校当初から既に老朽化しており、修理を加えて使用していた。(①④)[資料４]

f.「九段校舎」の建物は木造ペンキ塗り総二階建てで、梧桐に囲まれていた。この梧桐については、児玉花外が作詞した学生歌の歌詞にも謳われている。(②④)[資料５]

g. 建物の老朽化と狭隘を理由に、補助金を得て、成田千里学監が地主と昵懇であった池袋に移転した。(①)

h. 当時の学生は、梧桐に囲まれた「九段校舎」のオンボロ校舎に愛着を感じていた。(②)

以上が、現在私たちが共有している「九段校舎」に関する情報である。



資料５　開校間もない大東文化学院「九段校舎」
(『大東文化大学創立 80 周年誌』より)

2．法政大学に遺された大東文化学院「九段校舎」関連資料について

次に本章では、今回調査した法政大学の刊行物及び法政大学が所蔵する史料に、大東文化学院「九段校舎」に関する新たな知見を求めてみたい。

（1）法政大学八十年史　編纂実行委員会『「法政大学八十年史」資料第一回座談会速記録』、1958 年。

大学の隆盛期と予科（9 頁）

（前略）内田　（中略）大正九年に新大学令になつたときに法政大学のあつた校舎を、古い学生たちはみんな愛称を豚小屋という。大東文化学院になつたとか、戦後は温泉宿になつたとか、いまでもあの建物がありますか。

高木　ふつうの宿になつています。

中野　焼けないでありますよ。（後略）

※筆者註　ここに登場する「内田」は、大正 9（1920）年に法政大学予科の教授になり昭和 9（1934）年まで在職した、後の小説家・内田百閒［明治 22（1889）年～昭和 46（1971）年］である。

（2）神長謙五長（霞五郎）『お濠ニ影をうつして（法政大学八十年史）』東京都千代田区法政大学交友会気付八十年史刊行会、1958 年。

九段上に新校舎建設（36 頁）

明梅先生学監として迎えられる

その年の十一月（明治二十二年）理事会で、校舎新築を決議し、九段上の麹町区富士見町 6 丁目 16 番地に「広袤四百坪」（三十年史記　実は三百十二坪）の敷地を購入し、大島誠治学監外二名が建築委員となり、設計は工学博士山口半之氏に依頼して、二十三年三月に二階建二百五十五坪の校舎新築に着手した。新校舎は六月に落成し、七月に移転した。（中略）

この敷地と校舎とは、現在の本学の敷地に移転する大正末期まで

引き続いて使用した。その後、一時大東文化学院の校舎になつたこともあつた。

（註、現在この敷地には旅館が建つている）（後略）

昔の九段坂（214 頁）

（前略）昔の法政卒業生にとっては、九段の富士見町六丁目の校舎は、またとなくなつかしいものである。

そこには梅先生の匂も残っておれば、ボアソナード先生の面影さえ思い出された。

校舎の周囲には梧桐がならんでいた。今でも、青い梧桐の葉を見ると、ふと昔の校舎を思い出す者もあるという。「梧桐の校舎」とも呼んでいた。「ブタ小屋」の愛称もあつた。（中略）

これは校友児玉正勝氏の思出の文である。（後略）

（３）法政大学百年史編纂委員会『法政大学百年史』、1980 年。

第一編　通史／第四章　確立－和仏法律学校時代／３　初期の和仏法律学校／発足当初の姿（123 頁）

（前略）一〇月一日の理事員会において、正式に敷地購入・校舎新築のことを担当する委員会が設けられ、栗塚省吾・大島誠治・森順正の三人が互選により任ぜられた。まもなく一一月、麹町区富士見町六丁目一六番地の土地（現在の富士見校地から東北へ約二〇〇メートル、衆議院議員宿舎の隣あたりになる）三一五坪が購入され、ついで二三年四月、二五五坪の木造校舎の建築が着工され、七月に竣工をみた。新校舎には、六室の「講堂」と事務室、応接所、書籍閲覧室等が設けられた。（後略）

同／第六章　大学令による法政大学時代／現在地に新校舎建設（208 頁）

大学昇格当時の本学校舎（麹町区富士見町六丁目一六番地）は、当時学生に「豚小屋」愛称されていたと伝えられているほどに貧弱

な建物であった。（後略）

（４）法政大学百年史編纂委員会『法政大学の 100 年〈1880－1980〉』、1980 年。

和仏法律学校時代　九段上校舎の頃（1889－1920）／校舎の新築と移転（24 頁）

（前略）しかし手狭のため校舎の新築に踏み切り、麹町区富士見町 6 丁目 16 番地に約 315 坪の校地を購入し、木造 255 坪の校舎を新築した（23 年 6 月竣工）。こうして約 30 年におよぶ〈九段上校舎の時代〉が始まったのである。同地は現在、高層の衆議院議員宿舎の隣地になっている。

大学令にもとづく大学時代　外濠に立つ校舎（1920－1949）／九段上校舎正門と第 36 回卒業式（60 頁）

大学令による大学として認可され、富士見 4 丁目の新校舎の建築がすすむなかで、大正 9 年（1920）6 月 27 日、第 36 回卒業式が九段上校舎で行われた。翌 10 年 4 月に新校舎が竣工し、以後の卒業式は新校舎で行われたので、この卒業式は、九段上校舎の最後の卒業式となった。明治 23 年（1890）6 月にはじまり、約 30 年間にわたった〈九段上校舎の時代〉が、こうして幕を閉じることになったのである。

（５）法政大学百年史編纂委員会『法政大学史資料集　第四集』、1980 年。

七　東京都公文書館所蔵法政大学関係公文書資料（その一）／大正 12（1923）年／ 770 東京市麹町区富士見町六丁目十六番地の土地建物売買契約（197 ～ 199 頁）

［文書目録］

五　大東文化協会　大東文化学院　設立者　大木遠吉　位置及校舎変更ノ件

内務部長㊞　学務兵事課長㊞

進　達

大東文化協会

大東文化学院

設立者　大木　遠吉

位置及校舎変更ノ件

右第三式経由印ヲ捺シ文部省ヘ進達スルモノトス

内務部長　学務兵事課長㊞

下　付

同上ニ対スル指令

大正十二年十月二日認可

右第四式経由印ヲ捺シ麹町区役所ヘ送付スルモノトス

……

大東文化学院位置変更届進達願

今般火災焼失ノ為大東文化学院位置別紙ノ如ク変更致度仍而届書正副二通差出候間其筋ヘ御進達被成下度此段相願候也

東京市神田区錦町三丁目十番地

大東文化協会々頭伯爵　大木遠吉　印

大正十二年九月　日

東京府知事　宇佐美勝夫殿

……

大東文化学院位置変更届

東京市神田区錦町三丁目十番地所在

建物　二百五十三坪九合七勺半

右ハ今般設立スヘキ大東文化学院校舎トシテ主務官庁ニ申請中ノ所

火災ノ為全焼致候ニ付別紙土地建物売買仮契約書写ノ通東京市麹町区富士見町六丁目十六番地ヘ位置ヲ変更シ該箇処ヲ以テ大東文化学院校舎ニ充当致度此段御届候也

大正十二年九月十五日

東京市神田区錦町三丁目十番地
大東文化協会
大東文化協会理事
買受人　木　下　成太郎　印

右証書二通ヲ作リ各自其一通ヲ保存ス

……

大東文化協会事務所設置届

東京市神田区錦町三丁目十番地
大東文化協会

右ハ今般今般火災ノ為焼失致候ニ付左記ノ如ク仮事務所設置致候間万事交渉ハ左記ヘ相願度此段及御届候也

東京市麻布区宮村町十番地
大東文化協会仮事務所

大正十二年九月　日

右届出人　同協会々頭伯爵　大木遠吉　印

東京府知事　宇佐美勝夫殿

会頭　伯爵　大木　遠吉　印

東京府知事　宇佐美勝夫殿

……

土地建物売買仮契約書写

三収印　銭入紙　印

東京市麹町区富士見町六丁目十六番地所在
一　土地　三百九十四坪六合九勺
一　建物　四百四十九坪五合八勺
右土地及建物ヲ包括シ代金十五万円ヲ以テ売買スヘキコトヲ仮契約ス

大正十二年八月三十日

法政大学理事学長

売渡人　松　室　　致　㊞

【大正十二年　学事　教育法人　第一種　東京府　冊ノ八五　図書番号 305/B1/5】

（6）霞五郎『法政大学物語百年史』法友新聞社、1981 年。

九段上（麹町富士見町六丁目）の校舎時代（34 ～ 35 頁）

東京仏学校と合併して和仏法律学校となった明治二十二年十一月の理事会で校舎新築が決議され、九段上の麹町区富士見町六丁目十六番地に三百二十坪（三十年史に依る）の敷地を購入した。（中略）これから大いに発展の道を進もうという空気が校内全般にみなぎっていた時だから校舎新築案は意義なく理事会を通過した。学監に就任したばかりの大島誠治外二名を建築委員に挙げ、設計を工学博士山口半之に依頼して、二十三年四月に着工、洋館二階建二五五坪が七月に完成した。七月十二日第十一回の卒業式を兼ねて落成式が行われた。（中略）建築費は一万二千余円で、「学校の理事者、其他関係ある諸氏の義金」であった。（箕作校長の学事報告）

梧桐の校舎＝場所は九段の高台、靖国神社の裏の方で、現在の衆議院宿舎の近くに当たる（現在の大学本部キャンパスから東北に約三百メートル位）。九段下からいまの中央大鳥居までは一本の参道をのこして左手に小さな馬場があり、参道右手の道路は九段坂と言われたすごい坂となっていた。坂の上には山梨宮邸の拡大な敷地が

あった。向合って西尾子爵邸、尚泰候邸の大屋敷があり、その東北に面した一角に新校舎が出来た。校舎のすぐ前が通りで坂になっていた。その近くに富士見小学校があった。（中略）三二〇坪の敷地に二五五坪の建物を造ったのだから、建坪立ぎりぎりで運動場は無かった。校舎の正面から横にかけては梧桐が数十本並んで植えられており、この梧桐は校舎のシンボルでもあった。この校舎には大正九年現在の敷地に移転するまで居た。大学昇格もこの校舎で実現した。（中略）

とにかくこの新校舎は、我が校に一エポックを画したのであった。「敷地三百二十坪、校舎二百五五坪、木造二階建の西洋館で、その後に平屋の洋館が続いておりました。是が講堂兼教室でした。そのあと両横に少し空地があり、正面と両横は木柵で囲われ門はアーチ形の木造でした。その後生徒が増加して教室が狭いので、於くの教室の上に二階を建て増し、大きな講堂が出来ました。今から見れば小さなものでした（明治三十五年の卒業生三条商太郎氏談）

「富士見町角の梧桐の旧校舎には、校庭というべきものがなかった。僅かに校舎横でボールを往来せしめる得る空地が、梧桐の下に在るのみであった。これとても、その目的は決してキャッチボール等に存するのではなく、法定の建築空間地であった程のものである（大正十年卒業児玉正勝教授談）

児玉教授が「梧桐の旧校舎」というように、校舎に沿うた細長い空地に植えられた梧桐は生徒達の思い出の木であった。大正十二年法政が現在の敷地に移転してから、大東文化学院学院にこの敷地と校舎を譲渡したが、大東文化学院でもこの梧桐は大切にしていたらしく、昭和七年児玉花外作詞の同校学生歌にも「靖国神社を囲みつつ、万朶の桜咲くところ、理想の月の照る清く、梧桐の高窓青年の…」と、この梧桐が詠み込まれている。（その後はここに少年審判所が出来た）（後略）

（7）法政大学大学史資料委員会・法政大学図書館100周年記念事業委員会『法政大学　1880－2000　そのあゆみと展望』、2000年。

Ⅱ和仏法律学校時代（1889－1903）／和仏法律学校の発足（36頁）

明治22年5月17日、仏学会臨時総集会において東京仏学校と東京法学校の合併が決議され、新設学校は和仏法律学校と称することになり、仏語法律科・邦語法律科・専修科・普通科の4科を設け、初代校長に箕作麟祥を推して発足した。9月9日、特別認可学校規則により和仏法律学校学則が認可され、9月21日、生徒募集広告が出された。（中略）

明治22年11月、麹町区富士見町6丁目16番地の土地315坪が購入され、23年4月、255坪の木造校舎の建築が着工、7月に竣工をみた。新校舎には、6室の「講堂」と事務室、応接所、書籍閲覧室等が設けられた。（後略）

Ⅳ大学令後の法政大学時代（1920－1945）／専門学校から総合大学へ（52頁）

（前略）東京法学校が和仏法律学校となり、和仏法律学校が法政大学となったのであったが、（中略）大学令による法政大学の発足は、慶應義塾大学、早稲田大学、同志社大学、明治大学などの発足と一緒であった。（中略）まもなく、校地が、麹町区富士見町6丁目から麹町区富士見町4丁目（現在の千代田区富士見）に移り、新校舎（第一、第二校舎）が建築された。

（8）法政大学大学史資料委員会編集『法政大学　大学史資料集　第32集　法政大学歴代総長・学長の辞（一）　戦前編（1880－1945）』、2010年。

大正一二（1923）年／松室学長談話（『法政大学報』創刊に際して）辞77　本大学の概況松室致（学長）（182頁）

本大学の概況

学長　　松室　致

（前略）世運の進捗に伴ひ旧校舎は狭隘にして多数の学生を収容すること不能にして他の私立大学に比し甚だ遜色あるに至りしが為大正七年の春校友の主なる〔諸〕君甚だ是を遺憾とし此際校舎を拡大して校運を益々盛大ならしめんことを企画し其事を余に謀りたり余も亦是を憂ふること久しきを以て直ちに同意して爾来其の実行に当り孜々之を勉めしも微力意の如くならず幾多の辛酸を嘗めましたが幸に校友其他の有志諸君の多大なる援助に依つて大正十年現校舎〔の〕第一校舎凡そ千坪の建物を落成し又〔大正十〕一年に第二校舎凡七百坪を竣成致しまして今尚進んで図書館、研究室、閲覧室等凡三百余坪の建築に着手せり此建築完成後に於ては新旧の両校舎を合せ凡そ二千五百坪となるが故に従前に比しては其収容力大に増加致しましたのであります（後略）

以上の法政大学の刊行物及び法政大学が所蔵する史料から得られた、前章で見た大東文化学院「九段校舎」に関する情報に対する新たな知見を整理すれば、以下のようになろう。

A. 法政大学「九段上校舎（大東文化学院「九段校舎」）」（以下「九段上校舎」とする）は、明治22（1889）年11月の理事会で校舎の新築が決議され、これに伴って東京市麹町区富士見町6丁目16番地に315坪の敷地が購入された。大島誠治学監・栗塚省吾・森順正外の3名が建築委員となり、設計は工学博士山口半之氏に依頼して、翌明治23（1890）年3月に、2階建て255坪の新校舎建築が着工し、6月に竣工した。工事費は、1万2千余円であった［（2）（3）（6）（7）］

B. 法政大学が、大正7（1918）年から富士見4丁目に新校舎の建築を進める中で、大正9年（1920）6月27日、「九段上校舎」最後となる第36回卒業式が挙行された。翌年4月には、新校舎が竣

工した。[(4)(7)(8)]

C.「九段上校舎」は、法政大学の学生からは「豚小屋」の愛称で親しまれていた[(1)(2)(3)]

D.「九段上校舎」の大東文化学院への譲渡価格は15万円であった。[(5)]

E.「九段上校舎」の周囲には梧桐が植えられており、大東文化学院「九段校舎」もこれを受け継いだ。[(2)(6)]

F. 法政大学「九段上校舎」・大東文化学院「九段校舎」は、大正12(1923)年の関東大震災及び太平洋戦争をくぐり抜け、その後は少年審判所や旅館として再利用されていた。[(1)(2)(6)]

このように、大東文化学院が、大正12(1923)年に法政大学の「九段上校舎」を譲り受けて開校した際、既にその木造校舎は竣工から30余年を経過しており、法政大学の学生たちが「豚小屋」と呼んでいたことからも、かなり老朽化していたことがうかがわれる。

また、その一方で、大東文化学院の学生歌にも登場し、現在、大東文化大学薗の学園章や、父兄会名称(青桐会)にもシンボリックに用いられている青桐(梧桐)が、法政大学の「九段上校舎」時代から校舎の象徴として認識されていたことも明らかになった。

まとめにかえて

以上のように、大東文化学院の「九段校舎」時代の歴史を解明することは、同時に法政大学の「九段上校舎」時代の歴史を解明することにもなり、本学の学園史の解明のみならず、大正期以後の大学史研究の進展にも寄与するところが少なくないと思われる。今回は、法政大学側に残る資料の検討に止まったが、今後は「九段校舎」に関するあらゆる資料、例えば東京市をはじめとする地元自治体の行政史料や、当該校舎を使用していた学生たちの日記等の史料等にも目を向けていく必要があろう。限られた時間の中で、こうした関係史料を丹念に調査し、来るべき大東

文化大学の百年史編纂に備えていきたい。

最後に、小稿の執筆に際しては、法政大学大学史センター及び、同センター職員の北口結望氏をはじめとする職員の皆様に、大変お世話になった。ここに記して感謝申し上げたい。また、英文サマリーの作成に関しては、本学英米文学科の小池剛史准教授の手を煩わせた。心より御礼申し上げたい。

About Daito Bunka Gakuin's "Kudan Campus"

Koji Miyataki

It is well-known that Daito Bunka Gakuin (the predecessor of today's Daito Bunka University) was opened in 1923 at Kudan Kōsha ('Kudan Campus'). Located at 6-16 Fujimi-Cho, Kōji-Machi District, Tokyo, these buildings were inherited from Hosei University (which had called them Kudan-Kami-Kōsha (Upper Kudan Campus). This article will present new facts regarding Kudan Kōsha, discovered in historical documents preserved by Hosei University. Apparently, the building of the campus had started in 1890, costing some 12,000 yen. Around the campus were planted Aogiri (Chinese parasol) trees (Firmiana platanifolia), which Daito Bunka Gakuin adopted and which have been passed down to us as Daito's symbol mark. The most interesting finding was that the already depreciated buildings of the campus were called "pig sty" by the Hosei students of the Taisho period.